

2015年5月14日

各 位

会社名 株式会社 キャンパス  
代表者名 代表取締役社長 河邊 拓己  
(コード番号:4575 東証マザーズ)  
問合せ先 取締役最高財務責任者兼管理部長  
加登住 眞(電話 055-954-3666)

### CBS9106(SL-801)に関するASCO年次総会での発表について

当社と米国Stemline Therapeutics Inc.(以下「Stemline社」といいます)は、2015年5月29日から6月2日に米国シカゴで開催される2015年米国臨床腫瘍学会(ASCO: American Society of Clinical Oncology)年次総会において、当社が創出し2014年12月にStemline社へライセンス導出した抗癌剤候補化合物CBS9106(同社における開発コード: SL-801)について共同でポスター発表を実施することとなりましたので、お知らせします。

これに先立ちASCOのウェブサイトで公表された抄録(アブストラクト)には、次のとおり非臨床試験データが掲載されています。( [http://abstracts.asco.org/156/AbstView\\_156\\_150656.html](http://abstracts.asco.org/156/AbstView_156_150656.html) )

#### 《抄録内容(参考訳)》

##### 試験概要:

(XPO1の背景説明部分省略)Oncopanel 240種のヒト由来癌細胞株による試験と、ヒト由来癌細胞株を免疫不全マウスに移植した異種移植モデルを用いたin vivo試験で、SL-801の効果を検証した。また、ビオチンを付加したSL-801を用いた蛋白質相互作用解析試験(プルダウンアッセイ)で、SL-801とXPO1の結合を解析した。

##### 結果:

SL-801は、多数の癌細胞株に対して広範かつ高い抗癌活性を示した。血液癌細胞株におけるGI<sub>50</sub>値(半数の癌細胞の増殖を阻害する濃度)のレンジは、白血病で 3~93 nM、リンパ腫で 1~103 nM、多発性骨髄腫で 3~11 nMであった。また、固形癌(血液癌以外の癌)細胞株においても、乳癌、脳腫瘍、子宮頸部癌、卵巣癌、胃癌、腎臓癌、肝臓癌、肺癌、悪性黒色腫、前立腺癌、肉腫の細胞株で、GI<sub>50</sub>値 10 nM以下の増殖阻害活性を示した。

in vivo試験(マウス)でも、SL-801は相当な活性を示した。多発性骨髄腫細胞株ARH-77の異種移植モデルにおいては、SL-801を複数回投与されたうち90%のマウスが150日生存した一方で、非投与群の生存中央値は40日であった。このほか、急性リンパ芽球性白血病、非小細胞肺癌、前立腺癌の異種移植モデルでも高い抗癌活性を示した。

プルダウンアッセイでは、SL-801とXPO1の結合は処理後2時間で低減していることが示された。典型的なXPO1阻害剤レプトマイシンBでは8時間以上の結合を示した。

##### 結論:

SL-801は、新たな抗癌剤ターゲットであるXPO1阻害剤として広範かつ高い抗癌活性を示す、有望な臨床開発候補化合物である。

SL-801がXPO1に可逆的に結合する特徴は、正常組織が回復できる投与方法の樹立を可能にし、XPO1阻害剤の作用と副作用の間の幅(セラピューティックインデックス)を上げられる可能性がある。

現在、臨床試験開始を目指したIND申請(新薬治験申請)の準備を進めている。

CBS9106(SL-801)は、当社独自の細胞周期表現型スクリーニングを用いて創出した抗癌剤候補化合物です。核外輸送因子XPO1(CRM1)を可逆的に阻害し、細胞周期停止およびアポトーシスを誘導する低分子化合物であり、動物実験までの段階では、多発性骨髄腫を含む幅広い癌細胞株に対して抗腫瘍活性を有することが確認されています。

同じXPO1阻害剤として、米国Karyopharm社の抗癌剤候補化合物が現在臨床試験段階にあります。

CBS9106はこれと比較して、標的であるXPO1という蛋白質を分解に導く点が強みです。

XPO1は大変安定的な蛋白質であり、通常の阻害剤の場合、それが作用したまま分解されず細胞内に存在し続けてしまいます。その場合、XPO1の作用が(本来あるべき作用も)失われたままになり、副作用の原因のひとつになるおそれがあります。

CBS9106は、この蛋白質を分解するので、細胞は新たに(阻害されていない)XPO1を作ることができます。(このことを「可逆的阻害」と呼んでいます。)

これによって、正常組織が回復できる投与方法の樹立を可能にし、XPO1阻害剤の作用と副作用の間の幅(セラピューティックインデックス)を拡げられる、すなわち、副作用の少ない抗癌剤となる可能性があると考えています。

当社とStemline社は、今回の抄録にも記載されているとおり、CBS9106提携開始当初の予定どおり、2015年中のIND申請(臨床試験実施申請)および臨床試験の開始を目指し、共同で鋭意準備を進めています。

以上

#### 【ご参考】

##### 《Stemline 社について》

Stemline社(Stemline Therapeutics, Inc.)は、癌幹細胞とその他の癌細胞の双方を標的とする独自のアプローチで抗癌剤開発を行っている、米国NASDAQ上場の創薬ベンチャーです。

ティッカー: \$STML サマリー情報(Yahoo.com) <http://finance.yahoo.com/q?s=STML>

同社の先行化合物SL-401およびSL-701は、いずれも臨床第2相試験の段階にあり、高い臨床効果を示しています。

また、後続パイプラインとして前臨床試験段階の化合物 SL-501 および SL-101 を有しています。

詳細は、同社ウェブサイト <http://www.stemline.com> をご参照ください。

##### 《キャンバスについて》

株式会社キャンバスは、細胞周期表現型に着目した独自の創薬プラットフォームと機動的な基礎研究チーム・臨床開発チームを有し、自社創出化合物の新規抗癌剤開発を目指す、創薬ベンチャーです。

2014年12月、Stemline社に対し、CBS9106およびその類縁化合物の開発・製造・商業化にかかる全世界(ただし日本および中国・台湾・韓国を除く)における独占的な権利(サブライセンス権を含む)を供与するライセンス契約を締結しました。

このほか、非小細胞肺癌(扁平上皮癌を除く)と悪性胸膜中皮腫を対象とした臨床第2相試験をいずれも終了している先行パイプラインCBP501についても、製薬企業等とのアライアンスもしくは自社単独での次相臨床開発を目指しています。

CBP501は、多様な細胞機能に関わる蛋白質カルモジュリンの制御機能を調整し複数の作用により抗癌活性を示す、独特の抗癌剤(カルモジュリンモジュレーター)です。臨床試験結果の解析をきっかけに、既に発見されていたカルモジュリンへの作用を經由して、癌細胞のみならず、「癌微小環境」「癌免疫」「癌幹細胞」などに関わる広範な作用を有することが明らかになりつつあります。